埋もれた婦人運動家(6)島野初子

運動の裏方として社会主義にもとづく女性解放史と
共に歩んだ人はまた筆者の思想的な先達でもあった

石垣綾子（評論家）

第一回国際婦人デーの主催者□

大正時代は女性解放の擡頭した青春時代であり、それはまた私の青春時代にもあたっている。若い日の私に、思想へのめざめを促したのは矢部初子であった、今は島野姓を名のる彼女を、房州海辺の館山船形に訪れて久しぶりにそのころのことを話しあった。

私より八歳先輩の初子さんは、七十代になった今も、大正期に身につけた人間解放の思想を現実にいかす地味な仕事にうちこんでいる。彼女は若い日から、舞台の表面に立って派手に動きまわりはしなかったが、運動の裏方として社会主義にもとづく女性解放史と共に歩んだ人である。

「わたしはヤジ馬にすぎなくてね——。特別に何かしたというわけではないのよ」

初子さんはこう言うけれど、第一次世界大戦後日本の資本主義の転換期にあって、女性が目ざめだした大正期の生証人である。彼女の足あとは、この時代の生きた記録といえるだろう。初子さんは一枚の古びた写真をとりだしてきた。亀裂が縦横に入っているこの写真は、大正十二年三月八日、日本で最初におこなわれた国際婦人デーの集会である。壇上に立って話しかけているのは、当日の主催者、矢部初子で、あごを少し前に張り、シマの銘仙に長い羽織を着ている。この当時はみんな着物で、女がポツポツ洋装になりだしたのは、関東大震災以後のことである。

会場を埋める聴衆はほとんどが男性で、ソフト帽をかぶる若いサラリーマンであるらしい。彼らは上半身を前にのりだし、真剣な表情で初子さんの言葉にきき入っている。

この写真をみて、ふるい記憶があざやかに甦ってきた。この日、私は会場のYWCAの前に立って国際婦人デーのビラを通行人にわたし参加をよびかけていた。会がはじまると大いそぎで中に入り、後の方にたっていた。会場は満席で、二階もぎっしり男の人たちでうずまっていた。大正デモクラシーの花咲いたこの頃、女性の解放は一般の関心をよび、ジャーナリズムからも脚光をあびていた。この日の講師は、山川菊栄と沖縄県人と結婚していた仲曾根貞代の二人を除いては、大部分が名前も知られていない新しい女性たちだというので、いっそうの好奇心をかきたてられていた。

矢部初子が開会の辞をのべたあと、女医専（東京女子医大）を出た女医の佐々木晴子が、「金子ひろ子」という変名で壇上に立った。演

題は「女性の職業の可否」で、女医の立場から女性問題について話しだした。情熱をこめてするどく切りこんでゆく彼女の言葉に会場はシンとなっていた。最後のほうで「共産主義のロシアでは女性は…」というくだりになると、臨場の増田警察署長はきき耳を立てて、サーベルをガチャンといわせた。その時、群衆の中にまぎれこんでいた右翼の暴力団の一人が、「ロシアは女性を共有しているではないか」と野次をとばした。闊達な佐々木はその男をにらみつけて、ヤジを切り返した。ところが、「嘘つけ！」というどなりと共に、暴力団の一味は用意してきたビラをばらまき、会場は総立ちになった。

大正九年に設立された新婦人協会の幹部。右から矢部初子、平塚らいてう、近藤真柄、平山弁護士、奥むめお、一人おいて市川房枝

「弁士中止！」警官のこの一喝に、彼女は段をおりて、次に山川菊栄が演壇に立った。彼女が口を開こうとしたその瞬間、警官は「解散！　解散！」と叫びながら聴集の中に割りこんできた。サーベルの一隊は誰かれの見さかいなく突きとばし「外へ出ろ！」とこづき廻して、乱闘さわぎとなった。こうして集会は三十分で大混乱のうちにおわりとなっている。この日来ていた青野季吉は電通に勤務していたので、彼を先頭にたてて、激怒した数名の女性は電通本社に立ちより、日本で初めて国際婦人デーがもたれたこと、弾圧されたことを、海外の新聞社にあてて、電報を打った。それが大きく掲載されて国際的にも大きな反響をよんだ。主催者の初子さんのもとには見ず知らずの人たちから激励の手紙が数多くよせられ、新聞も当日の模様を報道するなど、女性の声がひとつの力をもったのであった。

この集会の陰の力となってくれたのは、雑誌『種蒔く人』社の人たちである。『種蒔く人』はヨーロッパで社会主義思想にふれて帰国した小牧近江が中心になって、秋田県の同郷者、金子洋文、今野賢三などで始められ、最初の三号までは経費節約のために、秋田で印刷していた。大正十年に東京へ印刷所を移して、反軍国主義、反資本主義の立場から民主主義を唱える民衆芸術の草分けとなっている。

執筆者として協力した人々は、秋田雨雀、有島武郎、長谷川如是閑、武者小路実篤、小川未明、山川菊栄、アンリ・バリビュースなどで、資金の提供者は新宿中村屋の相馬富蔵と有島であった。有島が国際婦人デーの会場YWCAを借りる資金をだしてくれた。「誰

にも言わないように」と言って、当時のお金で百円を渡してくれて、広い会場を借りることができた。

大正期婦人運動はここで□

英学塾卒の初子さんは雑誌の編集や翻訳などをしながら、英語を自宅で教えていた。そこへ習いにいった自由学園のクラスメート、岡村和子（のちに村山知義夫人）から、初子さんを紹介されて親しくなったのである。その頃彼女は、今は新宿区内になった矢来の天神町に住んでいた。そこは早稲田南町の私の家から歩いて五、六分の近さで、私は毎日のように出入りした。

母親と二人住まいの初子さんの家は自由の雰囲気があって、左翼学生、労働者、知識人のたまり場みたいであった。作家の葉山嘉樹、平林たい子、小堀甚二、画家の柳瀬正夢、社会主義運動家で暁民会の高津正道、組合活動家の高野実などもきた。猪俣津南雄は「インターナショナル」を教えたりした。当時の左翼の人々で、彼女の家にこなかったひとは殆どなかったであろう。

ボルシェビーキとアナーキズムの混沌とした時代で、天神町の家ではアナ・ボル論争や、革命について話しあい、人間解放の立場から恋愛の自由を主張し、奔放なセックス談義にも花を咲かせた。教育者の厳格な家庭に育った私には、目を見開くような新しい世界で、私はぐんぐん惹きつけられていった。

二間つづきの小さな彼女の住いの裏には、すすきやききょうの庭をへだてた離れに、東大新人会の学生、林房雄、志賀義雄、村尾薩男、是枝恭二の四人が下宿していた。みんなパリパリの左翼学生で、現在は思想の大転換をした林房雄も戦闘的であった。

彼らの友たちが自然に集まり、また女子学生も大勢やってきた。初子さんのお母さんは早く未亡人になった苦労人で、親切であたたかく、私たち若い者みんなの母親のような存在であった。私が行くと井戸端でお米をといだり洗濯などして家事の雑務をひきうけ、初子さんの運動に深い理解をよせていた。

私たちは議論の合間に、女性には禁じられていたたばこやお酒ものんだ。神楽坂にあったカフェ・プランタンは文士のたまり場で、私たちもよくそこへ出かけてお酒をのんだものだ。矢来には広津和郎、新居格、葛西善蔵などが住んでいて、ここの常連であった。あるクリスマスには、林房雄などと一緒に仮装パーティをここでやってにぎやかにさわいだこともある。社会の因習に抵抗して、とっぴなことを何でもやってのけた。初子さんの家に集まる女子学生には、東京女子大の渡辺多恵子、堀内竜子、女医専の川上あい子、国際婦人デーで話した佐々木晴子、日本女子大の石川清子などがいた。

勉強家の多恵子さんは学究的な志賀さんにひかれて現在は志賀夫人である。あい子さんは国会議員の黒田寿男夫人になっているひとである。日本女子大の清子さんは無政府主義者の岩佐作太郎の講演をききに行って、それがスキャンダルとして新聞に書きたてられた。

左翼の女子学生を糾弾するためにやったのである。そのやり方は下劣であった。ある新聞社の記者が彼女の家を訪ね、母親に清子さんが何か善行をしたからといって写真を借りて帰った。その翌日の新聞は顔写真をかかげた三段ぬきで、岩佐と情を通じていると、デカデカと書きたてた。清子さんは岩佐の講演をきいて感動し、感想文を送ったのだが、それをラブレターであるとでっちあげた。

女性を非難するときには「情を通じた」ということで、社会的におとし入れようとする。これと同じやり口は、機密漏洩事件の蓮

見喜久子さんに、不道徳な女の汚名をきせて社会的制裁を加えようとするのと何と似かよっていることか。清子さんの時代から半世紀たって、女性が解放されたという現在になっても、女をまいらせる権力側の手段は変っていない。清子さんはこのあと、軽井沢の寮に一ヵ月とじこめられて、反省録を書かされる羽目になったが、清子さんはトルストイの『懺悔録』をもちこんで、心にもない悔いの恰好をつけた。全校の学生や教授の前で、ざんげをさせられ、停学処分をやっと解除されている。

初子さんの提唱で、彼女の家に集まる女子学生を中心に、思想問題研究会が開かれることになった。第一回は佐久間町の川上あい子の医者の家で開いた。そこの待合室は狭く、また毎週借りるわけにもいかなかった。そこで二回目からは早稲田南町の私の家で開くことになった。私の父は地方の学校で物理を教えていたので留守であり、母を失った家庭にいるのは私と二人の妹だけであった。大勢集まっても文句を言う大人はおらず、勝手に使うことができた。

毎日曜日の研究会には十四、五人の若い女性が集まり、テキストには『共産党宣言』、猪俣の『共産主義ABC』、ベーベルの『婦人論』など使い、講師をかこんでにぎやかに話しあいをした。講師は顔の広い初子さんが頼んでくる。無料であるのに、快く来てくれた人たちは、青野季吉、鈴木茂三郎、経済専門の高橋亀吉、佐野学、徳田球一などであった。

研究会がおわると、手製のおでんやおしることを食べ、日曜ごとにわが家の台所はごったがえした。この頃の女性のリーダー格は、平塚らいてう、山川菊栄などで、私は初子さんの紹介で山川菊栄に手紙を書き、激励の返事をうけとったことをおぼえている。

この研究会に目をひからして、早稲田署の私服の高等係が調査に私の家に現われた。

「大勢あつまるのは怪しい、いったい何をやっているんだね」

詰問に対していいかげんなごまかしの返事をすると、「危険思想に近づくと、傷ものになって嫁にゆけなくなるぞ！」ととんちんかんなおどしをかけた。高等係はそれからもいくどかわが家にやってきた。アナーキストの大杉栄を迎えた夏季講習会に出席すると、すぐあとこの刑事がきて説諭していった。大杉は国際アナーキズム大会に出席するために渡欧し、パリでメーデーの日、演説をぶったためにフランスから追放されて帰国して、間もないときであった。慶応大学近くのお寺の一室で開かれた講習会で、大杉は浴衣がけのままあぐらをかき、少しどもる彼は人間味ゆたかで魅力的であった。関東大震災で彼が虐殺されたのはそれから二、三ヵ月あとのことで、私は大衝撃をうけた。

大正十五年に渡米した私はニューヨークで、グリーニッチ・ビレッジの反逆の世界に飛びこむことになるのだが、ビレッジは新しい思想の発酵の地であった。その雰囲気は初子さんの家を中心に集まって、生きる道を求める若者たちが、それぞれの背景はちがってもひとつに結びついてゆくのと同じような熱気に包まれていた。アメリカでも日本でも、社会の常識に抵抗し、反体制運動にひきよせられてゆくことに変りはなかった。この流れは現在の世界を救う反戦運動につながっている。

私たちの研究会は警察の干渉などで、半年ぐらいしか続かなかったが、『職業婦人』という雑誌が発行されると、そこに根を移した。この雑誌は奥むめおたちが始めたもので、初子さんはその編集をうけもった。大正の中頃から知的な女性の職場が開かれてきた

ことが、このような主張をもつ雑誌をうみだす背景となっている。

私はこの雑誌の手伝いをしている。一年の講読料として一円を出してくれる賛助員を得るために、女性問題に理解ある有名人の家をめぐり歩いた。『種蒔く人』に関係ある小川未明、秋田雨雀、今野賢三、金子洋文などよろこんで迎えてくれた。広津和郎、藤森成吉、柳瀬正夢、長谷川如是閑などを手わけして頼み歩いた。そのほかに神近市子、宇野浩二、江口渙、芥川龍之介、久米正雄、中央公論の嶋中雄作の兄の嶋中雄三も賛助員になっている。平凡社の下中弥三郎は資金面で世話になった。宇野浩二は本郷の菊富士ホテルに住み、しまの布団を敷いて、ねどこの中で原稿を書いていた。ねながら書くひともあるのかと、おどろいたものである。

上野の芥川龍之介は、一週間に一回の面会日があるので、一日中、ねばっていて、いれかわりたちかわり来る顔ぶれをながめていた。いきなりたずねていっても、どこでもいやな顔もされず上がりこんで話をきくのは勉強にもなった。私たちの願いを拒絶するひとは一人もいなかった。「あのころは女にとって仕事がやりやすかったのね、みんなが好意的ではげましてくれたもの、今のしっかりした若い女性なら、もっと大きな仕事をやるでしょうに――」と初子さんは当時をふりかえっていう。あのころは社会全体が前むきに動いているデモクラシーの時代で、めざめゆく女性をひきたてようとする熱意と善意があったことによる。

私たちは雑誌の資金を得るために、入場料をとって、思想問題講演会を開いた。会が始まっても、予定していた講師の無政府主義者の室伏高信が現われず、あわてて次の講師の大山郁夫を迎えにいっている間、司会役の私は、その穴うずめに話をしなくてはならなくなった。私が聴集の前に立って話したのはこれが最初である。壇上から見渡すと学生やサラリーマンの男性が大部分で、なかには私の顔をからかい半分にジロジロながめている男もいた。

『職業婦人』は『婦人と職業』とかわり、震災前後二年間ぐらいはつづいたであろう。初子さんは編集後記を毎号かいていたが、その雑誌は今も手許に残されているかしらと聞いたら、一部もないと言う。

「戦争中、紙がなくてトイレに使っちゃったのよ」

「新婦人協会」の活動家として□

大正十二年九月一日の関東大震災のとき、初子さんは麹町憲兵隊に検束されている。震災のどさくさにまぎれて大杉栄と伊藤野枝、それに七歳の甥を絞殺した憲兵大尉甘粕以下鴨志田など六人が、天神町の家にどやどやとのりこんできた。雨ふりの日で、彼女は傘をさして近所のお菓子屋に出かけていった。震災で甘いものが切れていたときに、やっと売り出されたお菓子だった。うしろからパタパタと追いかけてくる足音がして「聞きたいことがある」といって家へ連れもどされた。私服で長靴をはいた憲兵隊が彼女の家をとりかこんでいた。

初子さんはとっさの機転をきかせて、裏の離れの空室だった部室にあがりこみ、ここが私の部屋ですと言った。自室には山川均など左翼の人たちから来た手紙の束が整理中で、破った名刺なども、そこに散らばっていたからである。憲兵は彼女があがりこんだ部屋の戸棚をあけて夜具のにおいを嗅ぎ、「かびくさいぞ、うそをつけ！」とどなり、初子さんは仕方なく、自分の部屋に案内せざるをえなかった。机の上にある、二、三の手紙をつかんで、

トイレにいかせて下さいと言って捨てさったが、残る手紙や名刺やアドレス帳は憲兵の手に渡ってしまった。家宅捜索をされて、彼女はムリヤリに麹町憲兵隊につれてゆかれた。

そこは大杉たちが逮捕されて殺された場所である。彼ら三人が虐殺されたのは九月十六日で、初子さんの検束はその翌日の九月十七日だった。大杉たちのことが発表されたのは二週後になるので、彼女は知らなかった。甘粕は三十歳ぐらいの背の高い好男子で、彼は外まわりの逮捕役に廻されたらしく、訊問にきたのは他の三人の憲兵であった。恐ろしく暑い日であった。検束されたときにはメンスになったと言えと教えられていた。初子さんは必死になってそのように言い張り、すぐ帰してほしいと憲兵に迫った。家宅捜索の結果、特別な証拠物件はあがらず、非合法な活動はしていなかったので、その日の夜になって釈放されている。

このときの訊問で、彼女のこれまでの行動が筒ぬけになっていたことを知った。多分スパイがつきまとっていたのだろう。手弁当であちこちの社会主義の会合に講演にゆく彼女は、山川均の木曜会から頼まれて、中国人の二百人ばかりの集会に講演にいったことがある。通訳つきで「婦人と社会」という題であった。その日は官憲の立合いがないからということで、自由に思い切ったことをしゃべり、中止もくらわずに話をすませることができた。

ところが、彼女がそこで話したことも、講演の内容も、全部憲兵隊にわかっていた。左翼人と在日中国人との交流には切っても切れない深いつながりがあった。

初子さんが左翼の人との連絡係をしていたことも敵方は知っていた。歌人の江口章子はかつて白秋の妻であったが、初子さんが知りあったころは水谷長三郎の恋人であった。水谷は戦後片山内閣のもとで商工大臣になったひとで、京大出身の京都の旧家に生れている。江口さんは大森の待合で仲居となり、そこで水谷と会っていた。待合のおかみは学習院卒の変りもので、運動にも理解があった。

そのころ主だった左翼の人たちは刑事に監視されているので、初子さんは連絡の役目をひきうけていた。待合で日本髪に結い、仲居の恰好をして、山川均や堺利彦の家にゆき、同志がひっぱられていて、危険だから注意せよと伝えるのであった。変装してやったこんなことまでも、憲兵隊は嗅ぎつけていた。

彼女が主になって弁天町の宗源寺で開いた思想問題研究会も、憲兵隊のリストにあがっていた。講師として招いたのはインド哲学の武田豊四郎、北一輝の弟でのちに右翼になった早大の北玲吉、それに女性を集めるために、作家の吉田絃二郎の三人である。作家の吉田は今で云えば水上勉や五木寛之のようにポピュラーであった。三人の講師を交替で招いて話をきく会で、半年位は続いたであろう。警察がかぎつけて臨検にきたので、若い女性が来なくなり解散せざるを得なくなった。それからは個人的な集りにして、武田の家を借りたりし、大橋ふさ子（のちの佐々木茂索夫人）や尾崎士郎もきている。

話は本筋からそれるが、北玲吉がドイツに行ってから右翼になり、ニューヨーク経由で帰国するとき、すでに渡米していた私は在米日本人反戦グループと共に、彼の講演会の妨害に出て、開会を不可能にさせたといういきさつがある。

震災の翌年の大正十四年、治安維持法が成立して、昭和の暗い谷間におちこんでゆくことになるが、大正デモクラシーの高まりは反逆する女性の群をうみだしている。大正八年長谷川如是閑と大山郁夫の雑誌『吾等』が発刊され、この年に『改造』と『解放』が創刊

されてて、私たち女性もだまってはいられない革新の気運をうながされたものだ。河上肇の「社会問題研究」の毎号のパンフレットや『貧乏物語』は初子さんにも私にも多くの影響をあたえている。鈴木三重吉の『赤い鳥』が出たのもこのころで、心をゆさぶったものである。こういう雰囲気の中で、大正五年には『婦人公論』が創刊され、「青鞜」の解散以来、一時下火になっていた婦人運動も息を吹き返している。大正九年三月、平塚らいてうたちの「新婦人協会」が結成された。

初子さんはその幹部のひとりで、当時の『婦人世界』(大正九年三月号)をもってきて私にみせた。ページを開くと、東京田端のらいてうさんのお宅に集まった幹部たちの写真がのっている。らいてうさんを中心に、矢部初子、市川房枝、奥むめお、近藤真柄(堺利彦の娘)の顔がみえる。このときの相談会で、国会に二つの請願をすることがきまり、岡本かの子、田中孝子、山内みな子など、作家や組合の幅広い女性たちが馳せ参じている。

このころ治安警察法第五条というのがあって、女性は政治講演会に出席することもできず、政治団体に所属することも禁じられて、片輪扱いだった。この五条の修正を行なうことを第一の仕事として出発している。それともう一つは性病の男性の結婚を制限する法律の請願である。小説「花埋み」にも書かれているように、何も知らずに結婚し、夫から性病をうつされて、一生悲劇に泣く妻はざらにいた。性病防止への請願運動は多くの家庭女性をひきつけ、家庭雑誌の『婦人世界』が、大きくとりあげたのも、その一つのあらわれであるだろう。

広い層を包みこむ女性の声におされて、二年後には女性もまた政治的な集会に出席できるようになった。政治的な組織への加入は実現しなかったが、普通選挙の実施にそなえて、政治研究会がつくられると、その婦人部で初子さんなどと共に、私も研究会の発会式にはビラまきなどして出席している。鈴木茂三郎、嶋中雄三、高橋亀吉、青野季吉など知りあいの人たちの呼びかけで手伝いをしたのであった。新婦人協会は手はじめの運動が成功したのを機会に解散されて、婦人参政権獲得期成同盟と、赤瀾会とが生れている。赤瀾会は山川菊栄、堺真柄、久津見房子などが中心になって、女性の問題を資本主義社会の矛盾の一環として捉え、社会主義に結びつけようとするものであった。赤瀾会の講演会には初子さんも私も出かけているが、弾圧がはげしくて、警官の黒い制服にとりかこまれ、「弁士中止!」の連発で、ほとんど誰一人話しだすことができない雰囲気であった。このような圧迫は却って女性の目ざめをうながす起爆剤のようなものですらあった。

蓮見さんへの激励□

ふるい『婦人公論』をくってみると、矢部初子も書いている。彼女と『婦人公論』との結びつきは有島武郎と軽井沢で情死した波多野秋子を通じてである。秋子は『婦人公論』の記者であり、初子さんの飲み友だちであった。大正九年四月号の同誌は「女から観た男の改造」という特集をやり、平塚らいてうなどと共に初子さんも一文をよせている。彼女の主張は政治的に女性の地位が改善されようとも「女性の人格に対して、一視平等の人間的尊敬を払う心持ちが、男性の人格の根底に衝動として流れるようにならない限り、女性には真の昼間は来ない」という論旨である。この真理は現代でもかわりはない。それ故に、単なる法律の改正だけでは充分ではないとして、初子さんは派手な婦人運動の主役にはなっていない。

彼女が社会主義運動に入っていったきっかけは、兄の媒介でフェビアン協会に近づいたところから始まっている。フェビアン協会の山崎今朝弥、堺利彦などにふれあい、社会主義の本をよみ始めた。堺の娘真柄さんとは特に親しく、堺家には出入りして、利彦の影響を強くうけている。

初子さんが津田英学塾を選んだのは、経済的に女はどうしても独立しなければならないと考えたからであり、また女が独立し自分の資質をのばそうとすれば、どうしても、女性をがんじがらめにする社会の因習や古い家族制度に衝突する。それとたたかう途上で、社会の矛盾にぶつかり、思想的にめざめて社会主義に結びついていったのである。その過程は私もまた同じようなものであった。

彼女の夫は学生時代から社会主義運動をやっていた島野禎祥で、この船形の西行寺の長男であった。震災でこわれたお寺の再建のために、昭和に入ってから房州に移り、三人の子供をかかえて、夫の亡きあとは生活の苦労をなめている。房州で漁村の子供たち相手の「寺子屋」を開き、貧乏な子には無料で朝の五時ごろから英語など教えてやった。それが今では大きくなって、娘と共に「白百合幼稚園」と「英語学院」をひらいている。漁村の母と子のよりどころとなって、人間の生きかたの根底を周辺の人々の心にうえつけている。

彼女の人となりのあたたかさは触れあう人の心にしみいるものをあとに残し、ほのぼのとした気持をかきおこす。そこに一本通っている芯は、大正期に身につけた人間解放をめざす信念である。自分の思想を具体化する彼女は蓮見事件に対してもだまってはいられない。あの事件は私たち自身の問題であるという初子さんは、激励の手紙を蓮見さんにだすところであった。若い日からの情熱に、忠実に生きつづける彼女は大正期に育った反逆女性のひとりである。

中央公論社の文芸雑誌

海

7月号　定価260円

創作

稲垣足穂
川崎長太郎
唐十郎

連載

日の移ろい　島尾敏雄
書物の解体学　吉本隆明

連載小説

背教者ユリアヌス　・辻邦生
岸辺のない海　・金井美恵子
一九四五・夏・神戸　・野坂昭如

〈評論〉池田健太郎／渋沢孝輔／種村季弘／岩崎力／巖谷國士

〈書評〉奥野健男／秋山駿／宮原昭夫／篠田浩一郎